

## 特集 たましんの地域貢献活動

2006年に多摩地域の3つの信用金庫が合併してできた多摩信用金庫（通称“たましん”）は、今年創業80周年を迎えます。この間、多摩地域の活性化と持続的な成長と発展のために、本業の金融業以外にも様々な地域貢献活動を行ってきました。その一端を、多摩信用金庫（本店：立川）価値創造事業部の酒井克哲さんにお話を伺いました。

### ◆職員ひとりひとりが地域とつながる

「地域のイベントに約1,100人の職員が参画」「スポーツ大会にスタッフ協力」していることをホームページで知り、開口一番尋ねてみました。そもそも「信用金庫」とは、株式会社ではなく相互扶助を目的とした協同組織の金融機関で、営業テリトリーも多摩地域に限定されているようで、ゆえに地域の商店街に軒を連ねている日頃のお付き合いの中で、お祭やイベントには当然のように職員がスタッフとして関わったり協賛金を拠出したりの関係が昔からあったとのこと。さらに今年からは、入社1年目の職員100余名が立川市社会福祉協議会（市民活動センターたちかわ）のコーディネーターで、地元のNPOや福祉作業所などでボランティア体験をする取り組みを始めたそうです。市民の活動現場を体験したことで仕事面でも自主性が生まれたと、酒井さんはその成果を語ってくれました。また若い層だけでなく、数年後に定年を迎える職員にも地域でのボランティア体験を薦めているそうで、定年してから地域デビューする難しさが言われている中、先を見据えた取り組みと感じました。

### ◆住んでいる人にとって魅力的な街になるには

合併した当時の理事長である佐藤浩二氏（現会長）の、「住んでいる人にとって魅力的な街になるには、豊かな文化が必要」という理念の下、芸術・文化・教育・スポーツなどの振興にも力を入れてきました。最近では、多摩地域を愛する人々を増やすために、「(公社)学術・文化・産業ネットワーク多摩」主催の《知のミュージアム 多摩・武蔵野検定（通称たまけん）》に協力したり、新しい立川市市民会館のネーミングライツスポンサーに決定したとのこと（新愛称は「たましん RISURU ホール」）。

### ◆『多摩ら・び』から『たまら・び』へ

そして、たましんと言えば『多摩ら・び』。1997年6月に創刊されて以来、毎号特集で多摩地域の各市を順に取り上げてきました。その46号（2007年10月）ではNPO法人MyStyle@こだいらが企画段階から関わり、特集まるごと市民リポーターの原稿による『多摩ら・び』リニューアル第1弾が小平からスタートしました。やがて多摩を一巡し、この春リニューアル第2弾がまた小平からスタート（2013春

No.79）。雑誌名も『たまら・び』に、コンセプトも「まちの未来といっしょに生きる」に変わり、「人」にスポットをあてた、読み物の多い内容になっています。

### ◆80周年記念事業

この他にも、今年6月から新たに個人向け総合情報紙「広報たまちいき」を毎月5万部発行し、多摩地域内250ヶ所以上に配布し始めました。最新の11月号には「ふるさと多摩の魅力発見めぐりスタンプラリー第2弾（12月5日まで）」の台紙が挟み込まれています。80周年記念事業としては他にも、12月6～7日に「かぞく市～多摩の健康・介護・医療展～」が行われる予定で、約70もの関連企業がブースを構える他、デパートやホテルも巻き込んだ一大イベントになるようです。



### ◆地域の価値を創造する

合併を機にたましんは、10～20年後の地域価値をいかに高めていくかという視点から、それまでの「業務部」を改め「価値創造事業部」を設置し、100名以上の職員が多方面で地域とのつながりを作っています。酒井さんは「自分たちの独自事業は実は少ないんです。たましんだけではアイデアも限られますが、NPOやCB（コミュニティ・ビジネス）の方たちが豊かなアイデアを持っている。ならばそれを支援しようというスタンス、いわば私達の仕事は“中間支援”です。」と話されました。

### ◆リスが私達のお手本です

70周年の時に誕生したサンリオ生まれのたましんオリジナルキャラクターRISURU（リスル）。冬に備えて土に埋めたどんぐりが、春になると森のあちこちで芽を出し、やがて立派な木になり実をつける、そんなリスの習性を手本とし、地域の皆様を「利する」という願いを込めて名づけられたそうですが、常に中長期の展望を持ちながら本業のみならず多様な地域貢献活動にも力を入れているたましんを象徴するキャラクターだと思いました。（取材 田原）